



“ダボス雑感”——通信と放送の融合

(株)東芝 取締役会長 おかむら ただし
岡村 正



WEFダボス会議に出席して

1月末にダボスで開かれましたWEF（World Economic Forum：世界経済フォーラム）に2泊3日ほど行ってまいりました。そのなかで興味深い議論がございましたので、それを御紹介しながら、昨今の通信と放送の融合の問題について私なりにお話をさせていただきたいと思っております。

ダボスは、チューリッヒから車で2時間半ぐらいのリゾート地です。人口が1万2,000人といわれており、そこに世界各国から2,000人ほどの人が集まります。WEFは、サロン形式でいろいろな議論をする場となっております。昨今は政治色が強くなっており、国連の事務総長や、中近東、あるいはアフリカの政治家たちが来て、自らの窮状を訴え、世界の経済発展のために協力してほしいというようなことを議論する場にもなってきております。

私はITガバナーズミーティングというものに2日ほど出席してまいりました。ITガバナーズミーティングは、もともと情報通信関係の世界のCEOやチェアマンが集まり、今後の方向について議論を行うというものですが、今年はメディア関係の方も一緒に議論するということになりました。世界から50人ほどが集まりましたが、8割方がアメリカ勢で、残りのうちの15%がヨーロッパ、あとの5%がアジアでした。残念ながら日本から出席したのは私1人ということで、大変寂しい思いをいたしました。

そこでの議論ですべてが決まるとか、大きな方向が決まるということでは決してないのですが、あのような場に日本の情報通信関係者のトップが参加し、日本の現状を含めていろいろなことを話すのは良いチャンスではないかと思えます。機会があれば是非皆さま方も、ITのガバナーズミーティングに御出席いただければと感じました。

新しいコンセプト「デジタルエコシステム」とは

特に私として興味があったのは、「デジタルエコシステム」という概念が新しく登場したことです。エコは文字どおりエコロジー、生態系ということですが、デジタル社会を構成する生態系が、初期のステージではありますが成立

しつつあるということです。

具体的に申し上げますと、まずはコンテンツクリエイターがいて、そのコンテンツを配信するアプリケーションの事業者、加えてネットワーク事業者が、そして、受信する消費者の端末機器を製造するメーカーがいるという生態系が出来上がりつつあるわけです。そして、それぞれの事業者がバランス良く、彼らの言葉で言うところのルースインターコネクション（緩やかな結合）をもって全体の生態系を活性化するような動きに転向しないと、どんどんコンシューマーから離れていくという議論でした。

特に注目する議論は、その生態系の中でどれ一つとして弱いものがあっては成立しないということです。これは生態系の当然の理屈ですが、逆に、どれかが突出したかたちでこの生態系を構成すると、生態系が崩れてしまうということでした。つまり、先ほど申し上げました四つの事業者の中で、一社ですべての事業を行おうとするバーチカル（垂直）な結合が行われると、現在の段階ではこの体系は崩れてしまいます。したがって、ルースなインターコネクションをしっかりと作り上げることにみんなが努力をしなければいけない、ということでした。

今までは、どちらかと言いますと、IT事業者が自らの技術のデファクトスタンダード化をねらった活動が中心であった情報通信の世界の中で、コンシューマーの立場から見ると、やはりコンテンツが最も重要な問題であり、これからそのコンテンツの業界を含んだかたちでデジタル文化を築いていかなければ、みんなを不幸にしてしまう、という議論でした。考えてみれば当たり前の話ですが、それぞれの事業者がそれぞれの分野の事業者間での競争に明け暮れているということに対する一つの警鐘であるという感じがしました。

したがって、そのルースなインターコネクションを構成するために、まず、一つとしては安全なセキュリティのネットワークを構築する必要があり、また、DRM（Digital Rights Management：デジタル著作権管理）をみんなで共有しなければいけない、さらには、通信と放送の融合で問題になるように、レギュレーションの問題についても、全員が参加して一つのを決めていくという方向をしっかりと見いだし



なければいけない。そういう議論でした。つまり、このデジタルエコシステムという考え方は、当たり前の話ではありますが、すべてが連携をしてこそ、初めてデジタル文化がこれから栄えるということを思い起こさせる、一つの大きな警鐘であろうと、感心いたしました。

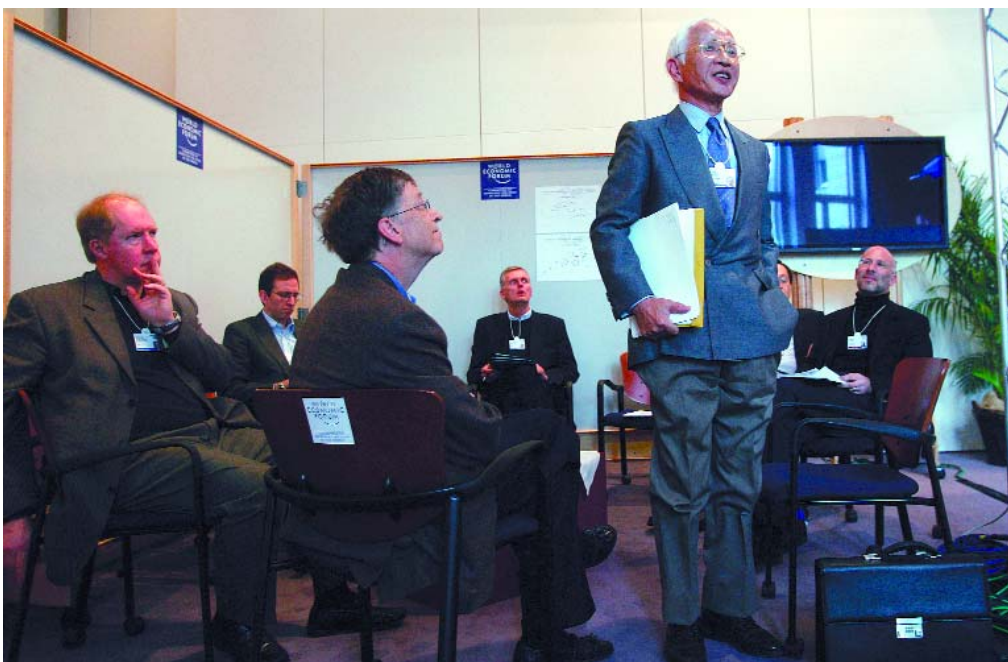
日本でも高まってきたコンテンツ産業への関心

日本でのエコシステムに対する動きというものも、当然ながら、今、大きく浮上しています。政府の知的財産戦略本部の中にコンテンツ専門調査会というのがあります。日本のコンテンツは非常に強いけれども、世界から見るとまだまだ産業としての地位が確立されていません。聞くところによりますと、アメリカではGDPの約4%がコンテンツ産業で占められているのに対し、日本では11兆円と、大きな産業ではありますが、GDPから見るとまだ2%です。ここでの話は、コンテンツ産業をいかに発展させるかという議論であり、それを受け、経団連の方でも、これまではどちらかというと製造業中心の運営であったのですが、もう少しコンテンツ産業育成

に対する注力を強くしていかなければならないという認識を持つようになりました。

そこで、私が責任者になっております産業問題委員会というところで、ソフトとハードの連携をし、もちろんキャリアの方にも入っていただいて、コンテンツ産業をこれからいかにして振興させていこうかというテーマで、議論を開始しております。昨年の春から議論を重ねておりますが、ようやく具体的な指標、目標が見えてまいりました。一つは、ハードウェアメーカー、あるいはキャリアの方々にも参加していただき、まずコンテンツポータルサイトをつくらう、というような機運が出ております。これについては国も大変理解してくださり、おおよその構築費を含めた予算の支援もしていただけるという方向に向かいつつあります。

まだ、日本ではコンテンツの二次利用についての基盤が整備されておらず、どこにどのようなコンテンツがあり、だれにどう交渉すれば権利関係の問題が処理できるのかということすら分かっていません。したがって、中小の経営者は大変苦労されておられますが、大変優秀なコンテンツが日の目を見ないまま消え去ることがあります。そこで、コンテンツポータ



World Economic Forum 2006のIT Governors Meetingにて。WEF事務局提供



ルサイトを何とか2006年度中につくり、これを多くの人で利用できるようなかたちにしていけば、コンテンツ産業も栄え、また、それをのせる生態系のそれぞれの事業にとっても、大きな意味を持つのではないかという議論が出てきました。

もう一つは、ユーザーにとって最もやさしい受信端末とはいったい何だろうかということ、コンテンツのパターンと一緒に考えてみようという動きも出てきました。これも難しい問題がたくさんあると思いますが、方向が固まりました。

また、テレビというものを考えたときに、IP放送も通信も受信ができるような共通した著作権管理の仕組みをつくり、それをテレビの中に消費者からは見えないように入れて、消費者はリモコンでIP部分、放送部分を分けることができるようなものをつくってほしいという要求が、コンテンツサイドから出てまいりました。端末側もそれに呼応したかたちで、これから標準化に向けて努力をしていこうということをお話合っているところでございます。

通信と放送の融合で心の豊かさを追求する21世紀の社会に

通信と放送の融合にしても、デジタルエコシステムにしても、これからは、ユーザー側から見たときに最も使いやすいかたちにするにはどうしたらよいのかということを中心にして議論すべきであると思っております。

20世紀には、メーカーは、技術開発競争ということに毎日明け暮れておりました。より速く・より大きく・より大容量で・より小さくという物理的なイノベーションを求めて活動を展開してきたわけです。

21世紀に入り、物理的な要求がほぼ満たされた社会の中で、これからのイノベーションは何かということを考えていきますと、心の豊かさを消費者は求めているのでは

ないでしょうか。そうであれば、コンテンツ産業の繁栄なくしてデジタルエコシステム関連事業の繁栄はないのではと思います。

では、心の豊かさというのはいったいどういうことでしょうか。21世紀のイノベーションの対象は何なのかということをお考えして、これは間違っているかもしれませんが、一応東芝自身として仮説を立てております。消費者の方々にはいかにして驚きと感動を与えるか。安心と安全をどうやってお届けするか。さらには、快適さをどうお届けすべきか。この三つが21世紀のイノベーションの源泉になるであろうし、そこから考えた技術開発でなければいけないだろうと思っております。

ダボスで感じましたのは、会議の参加者の約8割がアメリカのITベンダーのトップ、マイクロソフト、インテルといったところの人たちであること。そして、これまではそういった人たちから、消費者オリエントなどという話は余り聞いたことがなかったのですが、さすがに彼らも消費者がどう受け入れてくれるかということや、コンテンツ産業に対する思い入れから、その協力なくして自分たちのビジネスの将来はあり得ないということにやっと気が付いて、そういう議論が始まったということではないかと思っております。

世界がそういう方向に向かうなか、通信と放送の融合というのは、決して技術的な問題に終わるものではなく、向かっていくところは消費者にいかにしてコンテンツを配信していくか、そしてそれが心の豊かさを実現するものでなければならない、ということをお話合っていました。

皆様方と共に、新しいデジタル文化を開くために、一生懸命努力をしていきたいと思っておりますので、是非御指導・御支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

(2月23日 第345回ITUクラブ例会より)